ヲ
3
125

074388－000－7

特64－51

当世大つえぶし

瀬山 佐吉／刊

M21
CEI－1640

雲母六つ兄ぶくし

○もゝいゝ　せんどさんそのあとどふぞたやくゝたゝしてお
くれあるおさんぶろてうづらいゝゝたゝすてといあり
ませんよがあげるらたゝそふとけんくたゝだらけのあい
さろおきよひゝゝたゝとせきのがせたゝろて見せんと
日だゝ川とびこめばふるおさんびろゝりぎゆうてんし
おゝゝあゝたゝやゝあゝとゝ境をさしてそあげてゆく
○たゝしゝへ尾形がつく車のさきへうまがつくこゝあの
やゝゝたゝちやちがつくゆゝひんのとけいゝあゝりがつく
るまづのそばまゝねこがつくけいちやのあとまゝたとゆが
つくちやんさのしゆせんまでがつくどろがうに見がつくを
入浪よせがつく如房のるづけいたをゝつく

○さて八丁ぼりのもんざゑもんけん大門ぐちの丁ぎいどうぎりびつくり赤ぢちゃ〜〜かーでいござんせぬをこ丁のきやくんいおきたへさんじまをやもく〜こちらへおあがりとぼた丁へゑんのくもゑくあげやまちいろでもおまへいこ日用ゐぐやへてんかせんをかり半〜ふさうぶゐぐり〜

○ねめりうのくろふもいた〜めのりりづのうみゐはん人大きたくゐあげかひぐんおくくめちゑよだひくちちうへふれとぐすてうゐんちどろいてかざいをもちたこぶさろてもきび〜〜こうどよりちゆうぐんへちゆうゐさこうのちゑくゐいもそうしちやさるたとうゐたゐるしてくへしける

○おい〜〜ゐひふけゆくうい〜〜のみよのあさまりゆう

びんたぐたでことこうるたりがゐぶようやおうちゆうきつつぷふくろをろうをたたたのうちいたしやふ人りきぐるまたゐるいゆきどまりせいようどふゐつたをちんせんだひのまるふらかやぐうゐくやまちようどんくれんぐいづくりやいしのは〜

○京京市中のむきあのひようぐんきまたやのむすめいかゐたゆへきんじよの人さんぐゐりゐぐるちやゐのゐむきまやうかされるいもやのむすめいふけているふゐ宮とくるまやの娘いのせゐぐるてうちんやのむすめをたりふゆくからうさやのおむきんぐれゐでもさせまさる八百やのむすめいハ十六さゐたふゐふりてまつぐけぐんでそれくらふまろる代ぐんとうむ

○これハとうじのはやりのざんぎりかつらゐふちやのた
をりふくめんふまとしぐつたるぐひるりまれまれたぞ
こまちあいぢやゐの出合ふきらいのうめのこ右んねん
えんくゐいろんぜろそらうややぐりホコレラ病うゐこ
ろがしころびげいしやふるまづのふていさん
○とんざゑめりらひあてさゐてさようゐ見ゑくて出るりしで
ちうとあいうらおやゑんぐらい一ていを右りふ右れちろ
めいるうわをしてぬひたりちてよいぶぐつてうういそで
いろぶういうゐふあうきゐ出バつまくんひひゐゐぜれあき
ぬがちゐてさけぜうさでさりのハきごろしふづりひハたろ
ぷとつうひまを
○かくるりのるまけりのとらのうハのふんどしでいさくを

ごごろつゐのるうまりうそるりゐ九神とるをくんて
ゐ人おとこのそふぐらいろざとんたのりこそりづれ
ふもうりだらけあけくふおふくろのへそくりのゐぬ
ちをおやぢふゐられてうんどうされゐぜのうえの世
ふるろていゐでハあさくさでたいこもち
○たしくへ右をしくぐろうろハすべてじやりをひくざん
ぐりあくゐへちをちくだぐくのてびきがそでをひく
あうらんけいしやがおちやをひくよひざあがかぜを引
ぢしんでるまづがやくをひくちようろうわぐりがゐる
まひくちんぶんとつけてまいまちあとをひくちんん
うハおのが田へそづをひく
○大旅をたてるちべゐヨけのちぐこが目にろてがゐの

たいてうゃやげゐ人二ツ日三ツ日とまぎゆきをとういそう
でむろひふ四ぢらいさいうゐゐらぬねをニオ何のりきら
いるきうへいさんどうろむえちがるろゐらび何といか
えいしふ〜てかせぐんせ

○右のぶことひぢハさてえろゐさよらんやいくるうと魚ざん
ゆきのよのゐ紀て見ろ後てえろまてどあごしの〜ゆさ
いともゐにあり志きうるふけてたのよの月いひとろ心
いふろろ三ツまさのうゐいうへのうむろとてうだるゐ
の見〜がむりひふうくきのぐちもでるえぐ石れるがむ
りう志よんぐへエ

○えいほうゆさよれ〜こまいぐあこうゐのおとみりじや
ふぢえらのしへいこうあんときいるうさくらまるぞん

ぶんいヨふぢやあるめへうるるまやらぬとだいおんで
あふえうぜさばちひこのまろヨうがひきうけたみくる
まを志らびてぐちにとめてみよ志へいがみらんでうめ
まろさんらのひやうしまく

○ぐふゆらちがとれをゑてえゐがえくつのがえくちにけが
えへぶんとるくとびめぐりあろとくものえををもそゐべ
しどりやせうだんよう〜ろふとうらいとところいうべて
いさ〜んとされどもまろあらぬ志あんえうゆてのぞけ
どるうやひとへうちよいことでんしゐがありがてく

○あめれよふ日おちう〜のろけてまぐれこむよこはまう
らふゐがのりこみ八百人大づ〜ゆづ〜をおあらべらし
やひやう〜ぐひのつ〜ぼじゐえんくろぼが水をとしごと

する大将軍へやにうまへてまじめぐわ中ゐもひげの左
いたやがたら座人が仲ヨあうめどうたよりちょたゝい
てきとらり〜ちんめうらひとめ〜いし大こんにんぎんご
んほうまぐどち〜りつんでさちきとひきゆく
○「ア〜ぐちいさいせとものみせよひぐ〜みほれているも
のをむりひにつるゆきひらやなんぶどびんのヨて〜
でもあんまりちやまして〜くんぐんゐちいさいちとめら
むりひつめヨさしたおまへよさ〜みざらそんゐにする
だちいヨれちやたらぐたつどんゐこざらじゃあるまい
しかさくちだうりじやヨうりやせんとろくりむひよき
うさんせ
○源平のふるいくさともりいいかりをせゐてすいし
するたぐのりた狩ざくらや名畫をのとしてむちにけり
むん大将と見たてまつるひきくへしでしゐうぶする熊
谷たあつりをうつてほんつきまる名をれんしゐうとあ
らたむるみほのやとかげきこのうでつよのちとろひき
ゐそのよいちがあふぎのまとをめて矢はちまんとあぬ
いたり
○「あうのめしゐもく飯豆めしのりめし豆ほめ〜ひへめ〜
にだんこめ〜ゐめ〜たすめ〜うぎめしひきヨりめし
さ〜ぎめ〜ちそめ〜たゐヨえめ〜ちやめ〜にそめ〜粥
め〜ひるめ〜夜ゐぐめしたゐむすびたきたてたさごの
あさめし「めしかごこそうぐあまぎ〜やろうをりの
めし

○義左衛門えんある町の名いがごえまてんをろぎき丁忘
しんぐらのふぐん目たぞんとあたろてろぼう丁七段
目たあげや丁あとやさんきよくぶ三すど丁ふたる浜先
表いかとや丁八百やお七い表りの丁やぐら左こすや
のやすけが弥ざありん丁ひさまろ丁のりあろ丁あい皆
ちちみせのあろれぞへ
○おまいさんどちらくいきそんきおまいすたらへひや
かふふ女房いきあうてんしいへくことひいやりません
むとあがまつてあるよういのうりてそろくしかも
けまよんふういきるこちの人そのうひいあすい米
やさんふたらふくひぢんすけらいぶりことひい一合
のんで弥やちやんせ

十

○きりぐもおせろとてむうりぜげんのてふかり東
京町をかごにのりうられてうこれるつとめの男ほん
よくがいあくのせういきうりきられてうごずまいおや
たくさだのうげでおくおりひきりすりをきざきに
てあまつられて表をあうすこだれよだれていれどこの
月いまあらるらぬ
○おいくおさむらいこのうひきでんへうてあけよさ
だたくびつくりしいくきんきいりませぬやうな
ぶおそろいおさにへまいりまにやれあやうろな
おとこじやとよびくきあとも見ずしてひとたまり
くひもとらずふまげいぶすぎ空ろぶぐらい
○すたらふそうまち弦こくのちんぞうがりふひでお

十一

をゆくゝあげ方ふそ俵せんとりうぢげいしゝや方ゐお
もかぢハゆりてしゐ白ゐざゝをゝ大やゝくゝこお方ゝくゝいを
うをまるいふゝざゝたゝハひ紀志ゐでとこのうをお
いらんゐをばゐ紀あげるおきゐゝゐゐでゝらおつゝそ
そゐゝくゝゐくゝりまを

⊙むさすゝゝゐさりゐやおのれとばんしゝようあらえせて
のゝねバゐゐらゐ袖志ざゝをゐりゐ六ねんいせんに志のごゝを
おくゝゐハゝゝかりだされたゐないのちをやすゐさゐふ
たすりゐ袖らくゝばゐゐふきくゝらんきくゝのふねんちうき
きゝゐハゝとゐりとゐ紀ゐきのとしていつゝゐゐゐくゝをゐ
のとすゐゐすゐゐゐすゐゐすゐゐゐつゝくゝびつゝくりゐどゐきどゐりゐゐゐゐ
て方のゝこのゐりゝへゝたずはゐく

○いぢきゝとゐたちゐゐいゐようえせのゐゝめやゐたゝんゝご
てんぷらのあげゝていてりやゐんゝごゐりやゐんゝごゐねハ
いゝらたまゝりむきゝふゐいをゝらあゐゝごゐこをゝごま
するめいゐざゝらハゐゐびであゐゐいもゐゝくゝりちえ
じけまあすゝむゝゐゐうあゝごのやすゐうをゐゐをゐゐゐゝゝ
ゐゝゝたふゝくむゝゐめゝゝあんゝけゐでんゐゐんゝざけあんだ
いよゝをゝゐゐゐだ

○ゐあゝゝあふみのハけいをゝとにのこして三井ゐやせを
ゝゐう今ゝてゝにゐふゝれてゝらす件の丁のゝのゝゐゐろや
りの見目をゝみゐゐゝ田のかゝゐゝさせまゝゝにあゝゐのせ
いらんもゐくゝそくゝかゝゝひゝ石山やひゝらりゐゝをゝぬれていろ
ますゐゐらゝゝきのまゝゐゐひゐもあいきゝんハむゐきゐゝをゝゝせ

ぶる

○さんけいの人々たみる行脚で身拵をしめるぐいゐるで
しをとりこまへ弟うよゐてゐるものをかぐゐをつ
んでもいやじやとえそぶゆふうすひるんじややら大わ
ぬこゐれてゐくであろいるれてゐをゆんのりとさく
らいろそれゐらしすいのとびをとくおまくとりゐ
成田あらたゐく新橋をもつてゐらしとん

○ねづをるまのいふことをけげねこやいさちとことかを
りりたいるくもゐくのゐを大こくてんのつゐしめそ
れはこのををんとするあゐにるのがりをてゐさげて
「いごつりのいるいゐる」と町をうりあるくまこゐも
どくげあるるさけるやゐをるゐいあぐゐんげあるさゐるこ

れいうゐうまやたぐられるゐいそをるとゐが祝とゐるつと
しやるひゐるア

○清水おのせいげんたひとにたられしゐのいんゐをふつ
とえそあしさゐらひめこひのやみぢにまをふてかつる
えまばろしよるたゐめをそれふとそもをすられぬ心の
おゐゐが月をせめるいろたしゐんのゐつとやちやまゐの
あんはひとりつくねんとをびずまひるそうまむうつて
るをだおゐらのもれゐさり

○かを一ツ客一人ゐをゐ二ツはきゆゆ二人柿ゐ三ツ不見
三人ゐをゐ四ツはきゆゆ四人柿ゐ五ツ不見五人かをゐ六
ツはきゆゆ六人ゐをゐ七ツにをゆゆ八人ゐを八ツにをゆゆ八人
ゐを九ツはあゐ九人は柿十をゐ十人とれゆゆとお客ゐよ

くかきをくうゐ二ういのおきゆ〜ゞらくかきをくうゐ
ちよんゞいゐ
○堀川のるびすまひちゝじゃくいまりどつだとふざるを
ちよいおろしおちゆんと倩べ五ふいけんする二人ゑて
のばをとちてゝも門いるひさろづきちあうちをあごのひ
るねもころりとせのはよはゝ〜あろゝいゐついでふひ
よりとるそゝまふめでゝいゐねさゐ目おゝいとゐひふ
ゞかせゞせにさん三すゞふそくのさるまはし
○夕ゞれにふゞゆでいそゞせてちよのけしきえはぎ板板
つゆハをだゐとうむゝゆのあれきゝちやんせ辻ゝちや
松葉ゝんざしやたゝみざんふけてあゆよめきゞろうえ
ちのゞこひじいさそちろなさよ男でろうたゆどらしい

くせろしてびゆうぶゞこひのゆだちぞけさの雨にかへ
さりゝりゝおたゞいにこひ葉の中じやものの
○世のあろのくこいりのあふせいあろまりをゆうげんを
ちよろうよいゝ〜ゞたゝうぐだそちうさゞつけをろびろ
こゞまくをひくてんゞりふゞちゆをひくてんゞりうんで
うしおゝしゞ上るりゝゝりまんぶゝいでゝろくちゞふ
へをふくゝぬけゞふ作ごとめゝちゞ見抱ゝこの芝居
をゝゞげできいたちゞゝこひ〜どんちゃんまちゞいまして
おゝ〜ゝろ
○おゝいゝゝゞいげんさんこのゝゞおまくはおたのゝゆ外
へゝくかゝこまりまゝゝたさろそくでゝけてゝちゆけゆ
ちよろうひゝくいゐさついてつをゝりでゝろておゝれゞん

こくきてしれをやれ〳〵むだひるゐかしとせびもるく
さいだんくらんもりてなのもしとぐのつもりハちんだい
かぶりがおさぐまり
○十二支の子がちう〳〵丑がもう〳〵車ひ〳〵さ〳〵やぶに
とらがすむうさぎがお月さまそれねるくろいくもホ
さるがねとまく白いへびがあよろ〳〵出さちこいうま
であろさいさくらにあせこまつなぐたるがちるひつ
じゅかをくう猿がもゝにまとりトケツコウ赤ぶちま
んドンてうぱうきいてあけるちく
○たまのまうせことのおとあハのるといきゝうう波
のおとだせ戌おさるあい古いけやうまづとびこむ水の音
三でうのふくぢハつちのおとひつくりするのハうん赤や

くゐの音かん平さんこそちくにであいこッゐのおと桃
にひぐくかのおとたゐれざしきにくすかふをこつる
〳〵やせんのおとをきいていやのがびやうぶのうちのかを
のおと
○あんゝ仲百がぐちをいふひだちやいろりとことかまり
もつたいあくもは法をまりさむさちのぞそのときハ
女房がはりにざきねしてすこしからだがあたゝかふる
るとむゝをうちまきれのぼせてきこのあつひのと此
やうにふとんあいそをつゝされて赤があいまさしを足
にゝけてだゝてしまふといどうよくる
○おちがひとりにおりちん一人赤んぞがふくりにやりを
ぐ二人小ぢよくぐ三人よばけいゝやぐ三人さひこりちが

よろこんで若しゐ四人仲どんあくまは大ぶいあまびあま
んまどんが六人六まく六まんおさけが七ゑんあいちや
うじやまふひろはそう花おおきいよけれども私があけ
りやかんせうがくりませんうらあんどん旅やて居のこり
三人ちぢかきゐんてぐぞうにごめんと右やれゐる
○けいせいゐまことがあれがこそ目黒にのこせーひよくつら
ゐいてうれーさ表ちまさろよ早らつてつらいたひぐの
ことまぶをこてゐりにくぐびのつとあやりてい早らぬを
たろりおへやじやねんそうでこるいけんせられやいこち
でゐ右つのるされらまうらほれこ三ゐ右きりの二ゐ右げ
こぐさんのおさんたをでもこひといゐ右がくぐかりよろ
○おくゐりへ右ゐびよろ右のびこをりめーゐめげふる

うんぞのゐたこぐふさてこそゐーぐやたいせろゐ右よ
いさんへゐふりのじやたりくおりへめーつらいえろ
でこぐりますかつゐぐひさんゐるこのいのちいたんぐ
のらいまさくるひけんさそらまとぬいて右ゐ右ゐんの
くこさとこぐめさて
○界川のちさのるげめたるいたるさくごてんやまるりえ
さゐづの夕げしきあきいもみぢでかいあんじふ西たゐ
づけりこてぐびさきだるの西さげしきむさげしき件
ゐちらくやねぶねでるくに二上りんてこしう早紀る女
弟右ゐがくさりよりこれてちらくねづみるさ
○のろしくもこちぶさんもこーにさげこへ伊でぐさい
ますす日本一のきこだんごいぬきぐきゐつきやがきくより

も一ッやさいやとゐいさ〜ま〜よさゐく〜ちさごべてゐ
さろさこべてゐく〜やま〜ゐそろ〜いゐふじまのりんゐぶ
りゐんのくゐもゐくきりちじゐふどもゐそれてゐわく
のくさらといざ〜まん

○十月のおゐ〜さにかうぢうそろつてほりのくちゐるとた
くつゐちゐとよどば〜めいぶつだんごにむさしばうゐべや
よとゐ丁のそうゐんじゐむめうはゐれんげきゐうほんぐん十
六とおどうのそばへちうよんれがゐまさのゐんゐよぶお百ど
うどん〜くひちゐうむぐんでかりにいちぐらたのつぺいの
りうけとうふみやげいそぐきゐきぐりこ〜はしよか
ざぐるま

○ぢんとうぐ白ねづきうしげそろぷうようちだゐうぐひとら

のうへらつこのちやつぷうさぎのさうがてきんを〜てや
げざけのんでたちをくゐろゐぐこちらだのたゐけりの
あそんでむまをつれひアぐのくめんよさゐまゐくこちん
ぶんぐくゐとり紀若のひいめいひねとゐりせんのわらをうた
いぐたゐのちくこ名ゐゐてぐら

○たゐる〜とこひ〜さふちく〜をさぞねてかうやのやまへ
のぐりゐけばむこふよりひとりのごゐけぐじゐずま
ぐつてそれとみるよりころもふすぐりつき（コトバ）べこれまろし
で出家さゐこのみ山ふいまぐうしんぐまじまさびもちくて
こへ「きのふそろさゐいまだうしんぞくの名ハ（セツケ）加藤（ウフ）ちゐ
つちゐげうちと」きいてびつくりゐのゐふやゐのまだゐるぐゐ
ぐらに思ひれゐく

⊙せのろのあらいものハちゆうぐ〜金たゝ〜ゐんまろゝゝも
うせん金きゝよゐたらい日しおさんのわうべこゝタゞすこひ
のまろ米のけぐ〜ちゆうえにすんのあらいでゝいりの
あらいとりあべにやのうんだんてんぐのめんからすろり
まゝもあらいのいこひ〜いちゝこふであゝこゝときのむ
ゝめぐ石

⊙たゝとね山あゝ田めぐるめでたゝ田すゝとのふくずみやた
うのさゝ丑ちゆゝのうぶむゝぶこひぢのだうぐ〜田ありが
たいぞや玄のゝ〜ゝタゞれよそゝくらやぎゞゐめますて
たゐいうい石夕日に松火あしの田ゝまり板ゞあけりや
みやまにりゆうしやおこゐやありこづうみおせきゝよてゞこ
ゞすんでゝとりませいそゝりよじんのありゞゝき

⊙ゆにハいんのゝうゝたのゝ〜みハふうりうん人ハゝゝもをあつめ
てえろゆきやこひのむもにゞかさのゆきあれんやゐや
んせけさのゆさうらざゝとうふハのゆにつゝよゞ佐のゝ
ゆきそでたにゆにるゆきあうゐのゝ〜ゞゆきの形よゐ
ゞをうゝとゝきゝ丑せんゞんゞ世にのゆゝ家名ハゆきにろハ
てんるゞきゆきゝ見ぶゝ

⊙四季のあそびたさまゞ〜にたるゝろ日の出やまろゝまつる
うめにうゞひにたゐ見にまゝをえりさゝらにゝんぎゝつ
いてゐるゐろゐもむちさゝや月にゝそどゆゐゞにたるゐ
ごようゞんゞにをゞにゞにぼゝんにゐろのゝきあやめの八ツ
むゝてやひさひさあゆてたゞのゝこつゆもすいるゆこの
りふきゝくのさろゞきはうもう右ゝふもみじふのゆゐのまゝ

きふふけゆくかりがゆちくれのふゆごろり
○大内にふまろひきからくりいとをひきびコをひきかる
コきにつるをひくちろ〳〵ねづみいちをひく大八をけ
をひきまこ五合あとをひくうしめろ〳〵いくるまひく大
つるのおふにを味をひくまへをひくてうしのはまでをあみ
をひくちんぞにいけをひくおいらがかあそるがやのう
おぼうひく
○たびのころもにすぐうけのつゆけきそでを去をるらんあと
うのおんせきをとがくたまつきつとまりをるところへ
山ぶすぐこの十二人ゆくそうをまれとよびとあちれてたん
けいこうそくのくうんだんちゆうそれつちくとおりんそれ
ぐだいおんきゆうしのあきのつきちゆうじちゆう秋のるがき

ゆめおどろうすべきひともあしあぞといつまりありゆく
○たゆびをまろちくみめぐりあつてよいのゆくそくうみなふち
うらみいほさきふまろ川ぬくいたらひげあきらまてゆねん
つみのタ日かげぬひくそるげのたるのさとよいるのぐみ
めうといくたゆやたびはすみぐ川うめまろもどりに
こけやのひとよぶことり
○かるでほんちう去んぐら大去よいくねよがかぶとをあら
こめろ二だん目いほんざうげまろをきり三ぐん目いでん
ちうで大げんぐ五四段目いたんぐんせろぷくしぶぐん
めいちくいちやぢどの六段目いかんぺいたらきる七だん
目いなやだでおろるのみうけ八ぐんめいみちゆきすぎ
て九段目いるのうちこむよろ十ぐん目いあま川や義平

で十一隠日大切めでたくてうちそば

○あぶくの文すゞみてんぷらもしやにやきぶんごちゃり
そづひやつこひちるこにあまざけいくよりちさとりろ
こにうりすいくゝるらちちやにびいようとう九あげざ
つまいもそるさんごぞりづゝけまめちゐせんべいおぎ
ゐゐくぞゐふたまごの「こゝめ」あべくゝぞうにやあ
んころげこのきゆく

○ちろ午にきゆくゝくるゝ肉ちらとすぐこを三めぐりでよ
いゐひあまだろきれてくゆもいつゞけをしこやりゐりつ
まごひいゐりにゐりまゝよりどうそをつきぢにてつ
ぼうつゞまゝておくゐをちらすゐり茶のおいゐりにさ
きるのもきゞはゐぞあんまりつうつてちりがゐれうん面

されてむすこゝびつくりやれゝとんだめしゐ

○日のりこのめいけんそろひあまくふあまの井

ゐぞゐあこゝくゝませゝやうこんゐまきるゐこゐこゐ
ゐここるこれらゝやまこかぢほうけんめいさくそのうゐぞ
ゝ六百九十四ゐり九十四ゐりゝ九十九ゐさこかよひいろよ
みざれゝゐこひらゝおさこふゐのりむゐよゝくさんぢ
やうゐこのひら

○おりひこんだるこいゞちにゐこしや心もみざれやきいつ
ぞやごげんのせろだよりつゞこえそめゝこゞおりひこけ
ゐるこけころのちんぢろこゞるくまさむゐをぬゝゝもそ
こゝもちちさやでねてもさゐてゐ分ゝゐこふゐけうきし
づここゞだそはどにこゞれつゝいまゝちこくゐ目ゝゞも

たべきとおもへどきるにきられぬあいのこち

○盃の呑まらしほりかは与次郎へあさるまい一源ずいた

こまゐ一あけゐ一目くらいめをさまし女房い気をまま

一けいちやゝ一ゐたとりまい一やりちゝりをみりかん

ぬしでへいをふりまゐしいのりかけるどもいちんこを

ふりまい一やゝたそたろていまといふい一ごをふりま

い一

○酒のみのくせ一いゐらい上戸ゐあさ一やうごゐけも

ゐいことふたらをたち上戸一合上戸いよけれども用

のまをかゝねゝ上戸ゐいろでもこまるのいりくつじやう

ごわとひき上戸ゐさ一ぬけじやうごやり上戸い

ぬいでのこそのわとで日あ一をかりてもいちゐのうう

りひゞかづさいいちこのこゝり ちらふじやごんせん

さけのうへ

○ひと夜あけれが四すにめぐるゐかりのいろやくきつは

たゝとたたてうるまゐうざりうめがゐるやたろねき

くあさ日でひらくふくじゐそうむさらごがつくだね

のりきあけたやうのふゞひさいろうふみられてた

つゐめのうからふゐさめてくやしきあけからす「しち

ふくだんの名ほうまのりかゝりゐやまいだまゐいで

ゐゞやへもどりくる

○どものゐ平ん大つゐをかくぬしやのてまとりうしか

くさんゐんのまつゞいいこまいくくをはひようきでた

ぢをうくおてにいゐんぎきんにうくまけでゐまいにあ

たまかくのけんをいこれてたゝみかくもやぢたもあろてあせをかく志のごのりのくぞのたゝおやこのゐとりをくちでかくすとだ川でえうるぞかくらうそくやのかぞういねてもかく

⊙太白は志ろざとういろの黒いぐくろざとうせけんのひとゐかゐかしてよくのふうひのはこのりざとうるゐ〳〵あまいきてゐくゑ志ぬゐりかさとうひるをりきりやうじいろたゝ日のあいあんまさん女〳〵かいふえまりさんで〳〵ゐをすてすぐ〳〵どかくろとおりふたらつへがきくぬ「女ふ〳〵ゐふうらみいるけれどもあんまにつ屋ないどうよくゐ

当世大徳えぶし 終

明治十一年十月廿日印刷
同 十一年十月五日出版

發行者兼 東京府平民 瀬山佐吉
編輯者 浅草區黒舟町十五番地

印刷者 仝平民 陵部乙松
本所區石原町九十弐番地

賣捌全國各書林繪草紙店